

●座談会●

# 理系女性はなぜ少ないか



今井桂子●中央大学教授

佐々木政子●東海大学教授

秋山繁治●清心中学校・清心女子高等学校教諭

司会

平田京子●日本女子大学助教授・本連盟広報委員会委員

——敬称略——

## 理系女性が少ない日本の現状

平田 理系の大学卒業生に占める女性の割合は、日本では一四・四%と、諸外国と比べても低い数値であるとの調査があります。

なぜ、日本において理系女性は少ないのか、本日はこのことについてお話ししたいだ  
きたいと思います。

ひと口に理系と言いましても、受験科目  
での文系・理系と、大学における理系分野  
の二種類があると思いますが、本日はその  
二種類を含めたいと思います。

学問分野としては、理学、工学、医学、  
薬学など、かなり広い範囲を含みます。ま  
た、文系であっても、理系の分野を含む学  
問はたくさんありますので、そうしたもの  
も含めて、広く語っていただきたいと思  
います。

また、「理系女性」と言いますと、科学者、  
それも研究者のイメージが強いようですが、  
今回は研究者はもちろんのこと、専門職・

技術職に就く方々も含めて、広くとらえてください。

まず、理系分野における女子の進学率が低いのはなぜかという点について、性の特性はあるのか、あるいは「女性は理系に向いていない」という親や教師の偏見や環境が問題なのかななど、ご意見を伺えますか。

### 女性は理系に向いていないのか

今井 女性に理系の分野は不向きかといふ問い合わせですが、基本的には私は個々の問題であって、性別は関係ないと思います。女性は理系の分野が不向きであると考えるのであれば、それは、やはり周囲の影響を受けていると思います。

あくまで印象ですが、女子が理系に進むというお母さんたちと話をしますと、「どうしてうちの娘が理系に行くのかわからぬい」といったことを聞きますので、何かしらの外部の影響を受けているという感じはしています。

### 理系の教職における女性の割合も、中学

校、高等学校に行くほど、減っているように思います。もう少し女性の理系の先生が初等・中等教育から積極的にかかわっていただければ、理系を選択する女子生徒が増えるのではないかという気はいたします。

佐々木 女性に理系分野は不向きかということですが、そんなことは全くないと思います。おそらく、幼稚教育から中学校・高等学校までの教育の中で、家庭と社会の環境から、女性は理系に向かないという風潮になつてゐるのが現状だと思います。

また、大学までは、男性も女性も、理系・文系に関係なく障壁はさほどないと思うのですが、社会に出ると、理系というのは女性が就職しにくい分野があります。

そう考へると、将来設計を考えたときに、自分自身で女性には向かないと思つてしまふところがあるのではないでしょうか。

社会の受け皿がいまの状態では、女性が理系に進学し、職業を選択する際の障壁は非常に高いと思います。

秋山 私の中学校・高等学校は、ノートルダム清心女子大学の系列校です。

大学は文学部と人間生活学部を擁しております。もう少し女性の理系の先生が文系への進学中心の学校というイメージが強いです。

しかし、近年医療系を中心に、理系へ進学する生徒が増えてきたので、そのことに對してきちんと対応した教育を考えるべきではないかということになりました。

いままでは高等学校二年で文系・理系を選択するごく一般的な教育課程だったのですが、入学時から理系進学に対応したカリキュラムをつくるうとすることになり、今年度から「生命科学コース」を開設しました。「生命科学」としたのは、現状で進学者が多いのが、医療・農学・理学など生命科学分野だったからです。現在、一クラス三十人が、新しいシステムで学んでいます。また、女子生徒に理系を前向きに選んでもらいたための資料冊子を作成しました。この冊子には、本校を卒業して理系に進んだ先輩から、進学した分野の紹介と応援メッセージ、女性の理系への進学を取り巻く社会の現状データを掲載しています。

今井 桂子氏



平田 京子氏



全体としてメッセージ集という形にしたのは、女子が理系に進学しない最も大きな理由としてロールモデルが少ないと考えたからです。

またデータは、日本社会の現状を知つて考へてもらつたために用意しました。例えば「世界の大学の物理学科における女性の割合」を見ると、日本では圧倒的に少ない状況です。

この状況の根底には、家庭も学校も含んだ社会の影響がかなり根強く影響している

と思います。そのことを学校教育では考へていかなければならぬと思います。

日本では、中学生段階からかなり理系嫌いが進んでいますが、女子の選択肢として、「本当に自由」に選べることを大切にしてあげたいと考えています。

私たちの高等学校は、二〇〇六年度から文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けて研究しています。SSHは、各県の受験優秀校か、理系進学に特化したコースをもつてている高等

学校が指定されることが多いように思うのですが、本校では「女子の理系への進出」を打ち出して申請し、指定を受けました。その背景には、文部科学省の第三期科学技術基本計画に、「女性研究者の活躍促進」が唱えられており、女性研究者の採用目標を、自然科学系全体で二五%にするという方針があり、その中で評価されたのかなど思っています。

### 理系嫌いの先生が多いのが問題

今井 個人の話になりますが、私が数学科を志望し、ドクターまで九年間も大学にいるということに対し、親は何も言いませんでした。好きな道を行けばいいという選択肢を与えてくれたことは、とてもありがたかったです。

小さいころに少しでも、「えつ、なぜ数学が好きなの」といったひと言があると、子どもは敏感に感じてしまうと思います。

それから、自分の子どもを見ていて思うのですが、小学校などで、もっと理系の科

目を楽しく教えてもらえたならと思つていま  
す。先生自身が理系科目嫌いであることも  
多いのです。

秋山 先生方の中に理系科目のおもしろ  
さを知つてゐる人が少ないというのが現実  
なのでしょうね。

例えば、高等学校の先生でも、入試問題  
を解けるようにする事が高等学校の教育  
の目的だと思っていらっしゃる方が多いの  
が現状で、自分自身も研究テーマをもち、  
科学的な興味と探究心が旺盛な先生が多く

いるとは思えません。

### 素直に理系を選択できる環境を

佐々木 日本の教育の問題点は、早い段  
階から理系・文系に分かれてしまうことだ  
と思います。

秋山 中学校で理系嫌いが増えているこ  
とも大きな要因で、そのまま高等学校に行  
つて受験のための勉強になってしまい、さ  
らに嫌いになつてゐるようです。

理系嫌いの中でも、特に物理嫌いが進  
んでいると思うのですが、教科選択で、興味  
では選べない状況があると思います。例え  
ば、女子が理科で物理を選択したいと言つ  
たときに、「受験に使えるのか」と言われ  
ることも多いのではないかでしょうか。

私は、「おもしろそうだ、やつてみたい」  
という気持ちを大切にすることがまず一番  
だと思います。

卒業生で、大学の英文学科に進んだので  
すが、四年生のときに物理学がやりたくな  
つて、大学の物理の先生に個人的に指導し  
ていただき、理論物理を学んだ学生がい  
ます。最終的に学位をとつて、そちらの方  
面で活躍しています。

そのような例は特殊だと思うのですが、  
理系に進学したくても素直に選べる環境が  
整つていなかつたり、わかつてあげる先生  
方が少ないことは問題だと思います。

今井 おもしろいかどうかは一回やつて  
みなければわかりません。それも、きちんと  
取り組んでみなければ、自分に合つてい  
るかどうかの判断はできないと思うのです。

佐々木 政子氏



秋山 繁治氏



ですから、小さいころはいろいろなことを真剣にやってみる必要があります。そうすると選択肢が広がってきて、自分のやりたいことが見つかるのではないかと思うのです。

子どもたちが自分に何が合っているのか、

何が本当に好きなのかということが見つかることで、

何が本当に好きなのかということが見つかりにくくなってしまっていることが心配です。

それから、小学校からきちんと理系のおもしろさを伝えてくれる先生を増やすなければ、どうしようもないという気がいたします。

東京だと実験をする塾がたくさんできているようです。それは裏を返すと、小学校・中学校で実験が少なくなっているという」とでしょ

うね。  
佐々木 いま日本の小学校には、理科の実験室がほとんどなくなっています。昔はどの小学校にも理科実験室があつて、顕微鏡ぐらい誰でものぞけたのですが。そういうスペースが小学校にないというのは問題で、「科学技術創造立国」と言い

ながら、やつていることは逆行しています。ですから、小学校・中学校・高等学校できちんと理系を楽しませるような施策をするということは必須だと思います。

平田 大学がいくら対策をとっても、限界がある部分もあるということですね。

### 初等・中等教育の先生方のサポートを

佐々木 今年の一月に、東京都の教職員研修センターで、高等学校の物理の先生を

対象に、紫外線についての授業を頼まれました。二時間講義をして一時間実験をやつたのですが、先生方がとても喜んでくださいました。ということは、高等学校の先生

自身にも実験の経験が少ないようと思いました。私たちがサポートできるのは、そういう

秋山 イモリ胚の発生を観察する公開授業をしましたが、高等学校で生物を教えて

ます。

平田 卒業後の理系女性の社会的イメージについてはいかがでしょうか。女子学生にとって、理系分野におけるあこがれのモデルは存在しているのでしょうか。

佐々木 一昨年の夏に、西表島でサイエンス・パートナーシップ・プログラム（SPP）を実施しました。このとき、時間的に余裕がなく、生徒と先生が一緒に実験することになりました。

しかし、本来は中学校の先生が生徒のあこがれの的にならなくてはいけなくて、大学の教員があこがれの的になるのはだめだと感じました。毎日生徒に接するのは中学校の先生ですから。

ですから、このような場合は、担当の先生方にまず実験をお教えして、その先生方が生徒に教えるのをサポートするのが大学教員の役割だと思いました。

私たちがサポートできるのは、そういう初等・中等教育の先生方を理系好きにすることで、その先生たちが子どもたちに毎日接してくればいいのではないかと思います。

平田 卒業後の理系女性の社会的イメージについていかがでしょうか。女子学生にとって、理系分野におけるあこがれのモデルは存在しているのでしょうか。

理系女性のあこがれのロールモデルは、具体的にはどのような形であり、学生は認識しているのでしょうか。

### ロールモデルが見えにくい

佐々木 あこがれの的になるような理系

分野の女性の活躍は、日本のマスメディアではあまり取り上げられていないと思います。

かつて、アメリカ化学会が「ティメンション・イン・サイエンス」という十五分間のラジオ番組をやり、化学と化学者を上手にアピールしていました。こういう番組制作が日本でもできるといふと思います。

秋山 いま理系女性のロールモデルが早急に必要とされています。一番身近なのは、女性の理系の先生です。理系科目を楽しんでやっている女性の先生の姿を見ることができればいいのですが、数が少ないのが現状です。

今井 小学校から算数や理科が好きな女子が何となく疎外される雰囲気があつて、

理系に進学する女子が少ないので、結局理系の女性の先生は少ないとことになるのでしょうか。

そうすると、なりたいと思う女子学生もまた減ってしまうという悪循環が続いているので、どこかでそれを断ち切らなければ改善されません。

高等学校のときに地学の先生が地震の研究をされていたのですが、新潟で地震が起きたときにお休みをとつて現地に行かれ、帰つてきたあの地学の授業はずつと地震の話だったということがありました。帰つてきた先生のあの生き生きとした姿は、忘れられません。

受験には出ないけれど、あのときに地震はかなり勉強したという実感があり、学生にはそういう体験をしてほしいと思います。

先生がおもしろくないと、学生は絶対おもしろくないと思うのです。ですから、小学校から、先生が楽しんで授業をしてほしいと思っています。

大好きという感覚が伝わってくるような授業を理系の先生がしてくださると、小学

校から算数・理科嫌いの子どもたちが減るのではないかでしょうか。

佐々木 先生以外にも、専門職で活躍している女性もたくさんいるのですが、外からはなかなか見えません。ですから私もなるべくそうした機会をつくるようにしています。

今井 昨年度中央大学では、より多くの女子学生に大学院への進学を奨励するための企画をしました。

本学は隣に附属の高等学校があるので、高校生の来場も許可して、就職して数年たつて活躍している先輩に話をしてもらいました。

当日はかなりの人数が集まりました。やはり身近にいる先輩の話を聞きたいと思っている学生は多いのだと思いました。

大学院を出て社会に出ると、どういう専門職に就けるのかということを具体的に話してもらつたことは、学生にはいい刺激になつたようです。

平田 先生方ご所属の学部・学科を卒業される女子学生は、どういうところにいち

ばんあこがれをもつのでしようか。

**佐々木** 工学部の学生だと専門職が多いですね。学部卒・修士修了のほとんどは、企業に就職します。

特に男女共同参画社会が言いたされた当初は、各企業で5%女性を採用しなくてはならないということで、三年ぐらい前までは引く手あまでした。

しかし、5%採用してしまったら、「もういらない」というのが企業です。また企業では、男性の上司が工学部卒の女性を部下にもつた経験がこれまでほとんどありませんでした。

それゆえ、育て方を知らないために、いろいろな摩擦が生じ、私が彼女たちの上司と話をしたこともあります。

彼女たちはこれまで、男子学生と一緒に洗濯とやつてきたのですが、会社に入るとそうはいかないという現実問題に突き当たることもありますね。

**今井** 私は情報工学科なので、ほとんどのが情報関連の会社に就職しますが、文系よりは理系のほうが就職は有利だと思

います。

ですから、そういう意味でも「理系もいいですよ」というメッセージを発信しているところです。

### 身近な手本を示すことは効果的

**平田** そうしますと、あこがれのロールモデルが具体的にはなくとも、就職が有利であって、そこでメリットを手にしてしまえるという感じでしょうか。

**今井** 就職活動を通して先輩に会うことや、近い存在のロールモデルが見えてくるということはあるようです。

**佐々木** 女子大学だとロールモデルがたくさんあつていいですね。

今井 社会に出るといつところまでのロールモデルは女子大学でもあるのですが、そこから研究者として大学に残るとなると、ばかりと途切れてしまうところもあって、探すのが難しくなります。

ですから、女性も研究者としてもやつていけるのだといふところは、それこそ大学

でなければできないことだと思いますので、

そのようなメッセージを発信していきたいと思います。

**佐々木** 昨年、国立女性教育会館で、「女

子高校生夏の学校」科学・技術者のための「キヤリアを開拓されました。そのときに、「キヤリアを拓く——女性研究者のあゆみ」という本が女子高校生たちに配られました。

研究者として活躍している女性たちが、どのようなプロセスで研究者になったのかを紹介する、いわばロールモデル集です。

こういう本を高校生に読んでもらつて、「理系にいくのも楽しいよ」というメッセージを伝えることも効果的かと思います。

**秋山** 先ほども申し上げましたが、生命科学コースの冊子に、さまざまなお嬢から

の声を掲載しました。その中には、結婚して専業主婦になつている人も入っています。実際にはそういうこともあるわけです。

そういう身近なところから、自立して研究している人まで見せることによって生徒の理解も深まり、学内の雰囲気も変わってきた感じはしています。

佐々木 私の研究室でも、せつかく大学

院を卒業しても、二、三年勤めると結婚して専業主婦になってしまふ人が圧倒的です。

それが初めはとても悲しくて、女子学生を教えるのは大変だと思ったのですが、彼女たちが子どもを育てていくなら理系に興味をもつ子どもになるかもしれないし、それもいいかといまは思っています。

最近は技術士の試験勉強をして、子育てが終わったら技術士になろうと考える人も増えてきたようで、期待しています。

一〇一〇年には男性の技術者数が頭打ちになりますから、女性が進出していかなければならぬ状況です。女性は期待されています。

### 結婚・育児と理系専門職の両立

佐々木 諸外国に比べて、日本では子育てが大変なのではないかと思います。二歳の子どもを連れてフランスに留学した方は、研究と育児の両立に何も困らなかつたとおっしゃっています。

秋山 「女性の年齢別労働力率の比較」はM字型になっています。日本では、ちょうど研究の脂が乗つてきたときに結婚したり、子育てがあつたりしてその率は下がりますが、欧米では率は落ちません。

今井 制度 자체は少しずつ整備されてきたのですが、実際に休みがとれるかということが問題です。

その制度をなんのこだわりもなく利用できる環境が整備されていなければ、あまり意味がないということです。

一年間育児休暇をとれるかというと、やはりいろいろな制約から難しいところがありますから。

佐々木 私が大学で化学を専攻したいと考えたときに、「薬学を専攻しなさい。女性は家でもできる仕事をしたほうがいい」と言われました。

まだ二十歳そこそこのから、そのような助言は聞かず、実験室が必要な実験化學を選んでしまいましたけれど。

今井 理系でデメリットがあるとすれば、装置がないと研究ができることが多いと

いうことがあります。紙と鉛筆だけで済むのであれば、家に持ち帰ることもできますから。

いま男性にもゆとりがないので、結果的に育児は女性に押しつけてしまうところもかなりあると思います。

そうすると、ますます女性は苦しくなるし、理系の女性の人数は少ないので、あんなに大変ならやめようかと思われるようにも思います。

自分がいまがんばることで、続けられそうだと思ってくれる学生が少しでも増えたらいいなと思うのですが。

平田 女性の専門職に対する適性は、特に何も問題はないでしょうか。

秋山 男性・女性の特性というのが、結構どこまでが本来かというところです。

気をつけなければいけないのは、本来の性差の部分と社会的につけられた性差の部分を見極めることです。

佐々木 日本がいまおかしいのは、つくれられた性差が先行していることです。

今井 ですから、本来の性差はあるかも

されませんが、特色がもあるのであれば、いろいろな視点の人が一緒にやることによつて、よりよいものができていくはずです。そのバランスがいま極端に悪いので、社会全体として問題になつてゐるのではないかと思います。

### 女性理系研究者の少なさ

**平田** 理系の中でも、理学系の研究者に對しては、いろいろな国の政策が始まりつたあるような気がするのですが、工学系は少し弱い気がします。

**佐々木** 工学系は全くと言つていいほど変わつていませんね。大学教員の数を見ても、工学系は本当に女性が少ない分野です。国際的に見ても、日本の工学系の女性教員数は少ないです。

### 平田 情報工学分野ではいかがですか。

**今井** 私の学科では、教員の数は十一人で女性は私一人です。日本の大学で工学における女性教授の数は、一%程度というデータがあります。

**平田** 雇用の際の差別というのは、残つてゐるのでしょうか。

**今井** 以前は理系・文系に関係なく、女性の教員を探りたくないという世代があつたかもしれません、この一、二年で、業績で評価する方向になつてきました。ただ、候補者が少ないので人数も少ないということだと思います。

### 平田 理系専門職への就職の難しさの実

態についてお話しいただきましたが、次に大学が取り組むべき課題についてお話ししたいと思います。女子学生に魅力的な学問を提供できるか、それから高校生から見て魅力的な内容が用意されているか、お話しいただきたく思います。

**今井** やはり受験勉強だけをしてきたといふことから、導入教育が必要になつてきていると思います。

**佐々木** いま高校生を、芸術・スポーツとともに、理系好きにする一案として、東海大学では、付属高校生を対象にした学園オリンピックを開催しています。

い現状があるのですが、特に私の分野などは、組み合わせや確率など、あまり受験に出題されない部分が重要になるので、そこはもう一度きちんと大学で教えなければならぬという状況になつてきています。

**秋山** 大学が受験生を増やすために、受験教科数を減らしました。そうすると基礎学力がない生徒を大学に送るようになるんです。

**佐々木** 受験に出ないという理由で、理系の基礎科目が高等学校で減少しています。例えば地学を教えなくなつた高等学校が多くあるのですが、日本は地震国ですから、地学は非常に重要なのです。

**秋山** パックグラウンドがない子どもを育てている気がしますね。生徒たちも試験に出るか出ないかという基準で、勉強するかしないかの判断をしていますから。

**平田** 高等学校側から見て、大学との連

携で進める魅力的な教育というのは、どの  
ような取り組みなのでしょうか。

### 一過性の高大連携では意味がない

秋山 大学の先生が高等学校に来られて  
講演される、「出前授業」と称される取り  
組みが多く行われるようになってきています。  
それ自体は、大学の社会貢献として評  
価できるのですが、一過性の取り組みにな  
ってしまっては、もったいないと思います。  
さらに、有効な教育活動にするためには、  
一連の教育活動として組み込めるような内  
容が求められていると思います。

例えは筑波大学では、高校生対象の「高  
原の自然観察」「海洋生物学入門」という  
生物学に関する実習ができる三泊四日の合  
宿プログラムを実施されており、生徒にも  
大変評判です。

大学の寮で三日間、先生方にじかに指導  
してもらえるので、一過性ではなく、研究  
の疑似体験をすることで、かなり将来がイ  
メージできるようです。

佐々木 大学でのインターンシップみたい  
いなものですね。

今井 中央大学の数学科は、高校生を受  
け入れて、大学の数学の授業を受講できる  
ということになります。

裾野を増やすというよりは、数学好きの  
高校生をより数学好きにさせるという感じ  
ではあります。

また、実験設備があるということを生か  
して、学園祭のときに小学生・中学生を呼  
んで、研究室を回るという企画を行ってい  
ます。

ただ、女性に会えるかというとそうでは  
ないで、理系好きの子どもたちを増やす  
にはいいかもしませんが、女子学生をタ  
ーゲットとして考えると、理系はやはり男  
性が多いのだと思われてしまふかもしれません。

平田 いろいろな試みが可能だと思うの  
ですが、大学がいかに理系の女子を育成し  
ていくかは、いろいろなことが問われてい  
ると思います。

今井 まだ正式に軌道に乗っているわけ

ではないのですが、産学連携によって、企  
業で働いている女性の研究者に大学で講義  
をしてもらう取り組みを始めようとしてい  
ます。

そうすると、もう少し身近であこがれの  
ロールモデルが女子学生にできると思いま  
す。

秋山 私どもは大学があるので、高等学  
校で実験をする際のチューターとして、大  
学から派遣をお願いしたことがあります。

残念ながら実現しなかったのですが、大  
学院学生が高等学校の先生の補助につくと  
いうのは、生徒にとつては女性の科学者の  
卵と身近に接することができて、いい取り  
組みであると思います。

高大連携のやり方については、もう少し  
深められたらと思います。その部分では附  
属校・系列校をもつ私立大学だからこそで  
きる部分も大きいと思います。

佐々木 工夫が必要ですね。というのは、  
それが高等学校や大学の先生の負担になつ  
ては逆効果だと思うからです。

第一線の研究者が出向くような取り組み

もあり、もちろん有意義なことなのですが、

かがでしようか。

研究をされているからです。

教育研究に支障を来す心配があります。  
ですから、リタイアした先生方の有効活用なども考えたらよいと思います。力が余っている元先生方はたくさんいらっしゃいます。

秋山 高等学校には、教科の枠を越えて、

横断的な学習をする「総合的な学習」の時

間がありますか。自由に使えるか、あるいはその時間の使い方に困っていて、その場しのぎに大学を利用して、面倒を見てもらえばいいという形でやっている場合もあります。

扱いにくい総合学習の時間を大学に任せることで、大学も負担になってしまふだけです。高等学校側の手抜きだと思うのです。

ですから、高大連携の形を、双方とも真剣に考えていかなければなりません。

**平田** 授業そのもののあり方についてはいかがでしょうか。学生に対しても非常に満足のいく、つまり理系が好きになる授業を提供できているかということについて、い

大学でも求められる授業研究

**佐々木** 少なくとも私自身は、研究室に  
来た学生をみんな理系大好きにして送り出  
していると自負しています。授業も大学院  
学生はみんな喜んで聞いてくれます。

**佐々木** 大学の先生は研究をしながら教育をしていかなければいけないということですね。教えるだけではダメです。

**秋山** 私は四十歳を超えて大学院に行つたのですが、私が大学生だったときよりもずいぶんきちんと授業をされているという印象を受けました。

ンケートをとるシステムなどもかなりできています。

授業準備もされているし、終わつたあとに学生の意見も書かせるし、採点も甘くな

れませんが、いまはきちんと教育をしなければという時代になつています。

い。もしかすると、高等学校のほうが受験に振り回されて、本当の授業研究をしてい

私は高等学校で二週間ぐらい教育実習をした経験があるので、大学とはやり方

大学の先生の授業は確かに偏っています  
それでも熱意が伝わってくるのは、やはり

超えるか否かで、かなり雰囲気が変わります。

そうすると、高等学校であればこのやり方ができるだらうけれど、この人数だと無理だということと、九十分という長さをどう集中させるかということなど、大学にも授業のテクニックが必要になつてきていると思います。

それから、いまはノートをとれない学生が増えている感じがします。

**佐々木** このごろは先生方がパワーポイントなどを使いすぎていると思います。そうすると、学生はテレビを見ている受身の感覚になつてしまいがちです。

**平田** 高校生が学びたい学問の領域をうまく提供するというニーズに大学も応えなればならないと思うのですが、いかがでしょうか。

**佐々木** いま大学の学部や学科の名前がたびたび変わっていますが、選択する側の高校生にはとてもわかりにくのではなかと思います。

**秋山** 例えば、「自然情報学科」という名称になると、内容は理学部生物学科に近い内容を扱うコースであつても、進路雑誌

には情報系に分類される場合もあります。

また、「物質生命化学科」という名前で、「生命」が入つてるので、生物学の内容も学べると考えた生徒がいましたが、よく調べると化学系だったということがあります。

した。

**佐々木** 何をしている学科なのかがはつきりわからなければ、高校生が集まりません。見直しが必要かもしれません。

**秋山** 大学の先生に聞くと、広報活動が忙しくて研究できないという話も聞きます。生徒の取り合いの部分に集中しているけれど、育てる部分のことが置き去りになつている感じもします。

**平田** では最後に、ひと言ずついただけますでしょうか。

**佐々木** いま大学の学部や学科の名前がたびたび変わっていますが、選択する側の高校生にはとてもわかりにくのではなかと思います。

### 男女双方の視点を理系分野に

(一〇〇六・七・五 私学会館)

**佐々木** 理系に女性は向いていないといふことはないけれど、いままでの日本の社会の仕組みが、女性が理系を目指すことを阻害していた部分はあると言えると思いま

す。

では、理系の女性を増やすメリットはどこにあるかと云うと、男性・女性の視点を平等に扱える国にするということにあると思います。

本当の男女共同参画の国、そして、科学技術創造立国を目指すということです。

そのためには、女子が理系に進学しやすくなる教育を進める必要があると思います。

**今井** 大学は、「初等・中等教育からきちんと理系に進学する女子を支援してほしい」というメッセージを発信していく必要があります。

**秋山** これから五年間でのSSHの研究で、「女性の理系進出を支援できる教育システムの開発」をテーマにしています。その目的達成には、特に高等学校と大学との連携が必要だと考えています。これから、具体的な教育モデルが提供できるようになんばりたいと思います。

**平田** 本日はお忙しい中、ありがとうございました。